

第21回 教区宣教司牧評議会 共同体を意識した取り組み

6月25日、第21回となる教区宣教司牧評議会が開催された。

前回と同じく中央には聖書とろうそくが配置され、みことばの朗読と祈り、聖書の分かち合いの時間を持ち、この集いに主イエスをお迎えする気持ちを整えた。

次に教区のシノドス担当チームより、アジア大陸総会から発行された最終文書の紹介があった。青少年、教会活動、さまざまな事情を抱えた人びとへの対応といった、一人ひとりに身近な課題と希望を共有すると共に、それぞれの地区・小教区への周知をより推し進めてほしいとの要望があった。その後、グループに別れて、コロナ禍を経た共同体意識や今後の取り組み、また聖書の分かち合いを実践した感想などを話し合い、発表を行った。失われたものも多いが、信者だけでなく地域全体への新しいアプローチが今なら可能であること、そのためのきっかけを逃さない恒常的な努力が必要であるといった声が聞かれた。

最後に前田万葉大司教は、聖年である2025年に向けて、「希望の巡礼者」というテーマを意識しながら、日本で開催予定の大阪万博に訪れる海外の人びとをも巡礼者と位置づけ、ミサなどの情報提供や、歓迎の催しといった企画をどんどん提案して欲しいと呼び掛けた。

(文 教区宣教司牧評議会 担当司祭 大久保 武)



分かち合い前の趣旨説明

また、社会活動委員会の役割は、情報の伝達をして共有し、学び、具体的な行動に参加できるように呼びかけることであり、委員だけが活動することではないことを学んだ。大阪教区指針『新生の明日を求めて』の5つの教会像について、松浦謙神父から説明があった。

私たちの活動の源泉は「いのちのみことば」であり、福音と聖霊の導きに従って歩むものであることが強く心に響いた。

メンバ―を変えて2回

- ① 「谷間」に置かれた人びとの心を生きる教会 (誰一人置き去りにしない世界の実現)
- ② 「交わり」の教会(日本人の教会ではなく、すべての人に開かれた教会)
- ③ 共に歩む教会(司祭、修道者、信徒がそれぞれの賜物を活かしながら協働する)
- ④ 新生の歩み(単なる復興ではなく、新しい生き方)
- ⑤ 社会活動の霊性

私たちの活動の源泉は「いのちのみことば」であり、福音と聖霊の導きに従って歩むものであることが強く心に響いた。

全地区社会活動委員会のつどい

平和を目指して ともに歩もう

コロナ禍にあった過去2年は、オンラインとのハイブリッド会合だったが、5月27日、サクラファミリアでオンライン参加を含め、約80人が数名ずつのグループで分かち合いをすることができた。

難民申請中の方、仮放免中の方も含め、老若男女が集い、まさにシノドスのテーマ「共に歩む教会のため」交わり・参加・そして「宣教」にふさわしい会となった。

- ① 「谷間」に置かれた人びとの心を生きる教会 (誰一人置き去りにしない世界の実現)
- ② 「交わり」の教会(日本人の教会ではなく、すべての人に開かれた教会)
- ③ 共に歩む教会(司祭、修道者、信徒がそれぞれの賜物を活かしながら協働する)
- ④ 新生の歩み(単なる復興ではなく、新しい生き方)
- ⑤ 社会活動の霊性

の分かち合いの後、聖堂へ移動し、最初の祈りを行った。初めに、聖歌「マラナタ」を歌い、酒井俊弘補佐司教による「導入の祈り」の後、各グループの発表が行われた。聖書朗読とメッセージの後、派遣の祝福をいただいた。「高齢化に突進している日本人の教会は、国や人種を越えて共に進む道しかない」と身に染みて感じた。「その教会の伝統ややり方を主張してばかりで、若い方の意見を聞き入れないと、その教会に明日はないと思った」



ラジオ 信仰の時間

主よ、わたしの口を開いてください

6月担当：山口武史神父
(園田教会主任、6月25日放送分)

カトリックでは、殉教者を祝う日があります。殉教者とは、神様を強く信じた人が、その信仰のゆえに、命を落とすような迫害を受けることです。死ぬことに重きを置いている訳ではなく、自分の命を賭けるほどの神様を見つかることができよかつた、そしてその情熱を貫くことができよかつたねという日です。

しかし、迫害は、宗教だけではなく、言論にもあります。香港が最もひどい一つにあげられます。香港は、イギリス占領下であったこともあり、民主主義でした。しかし、本国の中国が共産主義であり、民主主義的なものは駆逐されています。そこで、民主主義を叫ぶマスコミがターゲットにされ、会社はつぶされ、社員は逮捕されています。大部分はマスコミから手を引きましたが、一部の人は、細々ながら言論活動を続けています。民主主義の残り火を少しでも保とうということで、苦しい生活の中、言論活動を続けています。必要なことは、言い続けなければ……とい

うことでしょう。

本日のミサの福音は、マタイ10章37～42節の弟子の派遣の心得の箇所ですが、迫害にめげないようにと励ましているようです。

イエスは迫害を目の前にしておののく弟子たちに恐れてはならないと命じます。そう言い切れるのは、覆われているもので、現わされないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはないからです。弟子たちが宣べ伝えようとしているメッセージは、人びとの目にはまだ隠された教えです。そのため、弟子たちは師と同じ迫害を覚悟する必要があります。しかし、イエスの教えの正しさが明らかにされる日は確実にやって来ます。まだ現実になっていない恐れを否定できるのは、神様の救いの計画が、確かな約束があるからです。

さらに、体を殺す者を恐れるなどもイエスはおっしゃいます。弟子が恐れなくてはならないのは「魂も体も地獄で滅ぼすことのできる」方です。

神さまの救いの完成の時には弟子たちの活動の正しさが明らかにされます。また弟子たちの命は神様の守りのもとにあります。だから、将来の恐れも、今の恐れも、弟子たちは恐れるに足りず、恐れる必要もありません。先にも今にも恐れる必要のない弟子が行うべきことは、明るみに言い、屋根の上で言い広めるといことです。迫りくる迫害にひるむことなく、イエスの語ったことを告げるという活動を始めるようにと求められています。

何カ月か前に学校ドラマを見て感動しまし

た。舞台は東京の公立中学校でした。コロナ禍の下で、行事は全てありません。しかし、生徒たちは、何かをしたいと思い、たまたま出会った路上生活者と協力し合い、町の空き地に段ボールの家を建て、お泊り会を計画します。しかし、この地域は、町内会が強く、そんなことは許しません。おまけに、彼らの中学校も、決まりが厳しい学校で、先生も許してくれません。学生が決行するなら、内申書の評価を下げるという始末です。生徒たちは、悩みましたが、実行することにしました。町中はたいへんです。町内会も、教師たちもつぶしにかかりにやって来ましたが、一人の中学生が「今まで、親や教師の言いなりになり、何故、分かってくれないの? と苦しんできた。でも、分かってもらおうとする努力が足りなかった。今、私は言う。お泊り会をやらせてください」と必死に言いました。それを聞いた大人たちは、そうだね。胸を打ち、お泊り会は、町中で盛り上がりました、というものでした。

神さまを伝えるのも、聞いてくれないと諦めがちのときもあります。まず、伝えるという姿勢が必要です。それは、宗教だけではなく、人間の生活すべてに及ぶことかもしれません。



毎週日曜日 5:50 ~ 6:00AM 放送

8月担当：ヌノ・デ・リマ 神父

ABCラジオ(朝日放送) AM1008/FM93.3

スマホアプリのradikoでも聴けます。